
虚ろな男の生きる道

アルフォンヌ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚ろな男の生きる道

【Nコード】

N7949Z

【作者名】

アルフォンヌ

【あらすじ】

夜空虚よそらうつろは現代社会の平和に飽き飽きし、スリルを追い求めている。その渴望から、虚は素行の悪い不良や暴漢、時にはそれより危険な相手に戦いをふっ掛ける日々を続けたが、それでも彼の心の空白を埋めることはできなかった。

そんな満たされることない日々を送っていた虚の前に、ある転機が訪れる。

これは、生まれる時代、世界を間違った一人の男が、別世界で生き方を見つけていく物語である。

プロローグ

映画や漫画のようなスリルのない世界など面白くない、と思ったことはないだろうか。ただ平凡に生き、死んでいくであろう自分に絶望したことはないだろうか。

この作品の主人公である、夜空よぞら 虚うつろという男はそんな考えを持ち、世界に絶望しつつも自殺をする意欲も無く、プログラミングされて動くロボットのよう日々を過ごしていた。

年齢は18歳、一応高校に通ってはいるが、それは、世間体を気にする親から通うように言われたというだけの理由だ。表面上の人間関係を保ってはいるものの、友達と呼べる人間はいない。家族という存在も虚にとってはただの役割に過ぎない。

虚は治安が良く文明が進んだ世界有数の先進国日本という国に生まれていながらも、日常や平穏といったものに価値を感じていない。そんな虚無的な男にも趣味はある。それは夜の街を徘徊することだ。

目が隠れるまで伸びた黒髪と白い肌、見え隠れする仄暗い黒い瞳、それら虚の身体的特徴は、夜という暗闇に以上なまでに同化していた。

虚の名字に『夜』という字があるからなのかは不明だが、彼は夜の時間を異常に好む。昼間は太陽に照らされ安全に見える路地や道路に建物がある、夜となると一転して暗く不吉を感じさせるものへと変化させる。その不気味さにこそ虚は『スリル』を感じていた。

しかし、虚の夜の楽しみはそれだけではない。

「よお兄ちゃん」

夜の道を歩く虚を囲むようにして3人の男が現れた。喋り方や恰好からいって、人を威圧し食い物にする、俗に言うチンピラだということがすぐに理解できる。

「ちょっと俺達お金なくてさあ、今度返すから財布ごと貸してくれねえか？」

虚の正面の男は威圧的な笑みを浮かべる。その態度を見る限り金を返す意思はなく、断った場合は殴る蹴るの暴行を加えてくるということは容易に想像できた。

しかし虚はなんら怖じることなく、

「嫌だ、と言ったら？」

「あ”あっ!?!?てめえ立場わかってんのかっ!?!?”

チンピラ達は囲みを狭める。一般人が遠目からこの状況を見てみるとしたら、数秒後にリンチにされる虚の姿を想像するはずだ。

まして虚の正面にいる男はポケットから折りたたみ式ナイフを取り出している。常人ならさっさと財布を差し出して彼らの脅威から身を守る術を取るだろう。

だが、虚は違った。いや違いすぎた。

「ほれほれ、早く出さないと綺麗な顔に傷が…え?」

虚の正面にいる男はナイフを見せびらかそうとしたが、そのナイフが自分の腹に突き刺さっていることに気づき、

「うぎゃああああああつ!?!」

数秒もしないうちに激痛に襲われその場にのたうち回った。

「お、おいおいおいおいっ!?!」

「はあっ!?!はあっ!?!」

残った二人は大きく動揺した。彼らにとってナイフとはあくまで脅しの武器に他ならない。使えば大事になるからだ。ナイフという凶器を持ち脅しを行なっておきながら、彼らは自分達が刀傷沙汰にまして被害者と言う形で巻き込まれるとは夢にも思ってもいなかった。

虚が行なった行動は、ナイフを突きつけられた際、男に知覚されないほどの速さと自然な動きで男に近づき、流れる動作で腕の関節を曲げ、ナイフを持った手を男の腹に押しつけるといったものだった。無論、ただの一般人ができることではない。

「ふっ、ふっざけんなよてめえっ!?!なにやらかしてんだコラアっ!?!」

「なにといわれても、正当防衛だが」

虚はまるで当然のことのように答える。その反応を見てチンピラ達は目の前の人間の異常性によやく気付いた。

人を刺しておいて平然としている者など、この日本と言う国ではまずいない。いるとしたら異常者に他ならない。

だが、仲間をやられていながらも、残った二人は逃走するなどという冷静な頭を持ち合わせていなかった。

「つつざっけんなああッ!！」

虚の右にいる男がジーンズの後ろポケットから警棒を取り出し殴りかかった。

しかし虚は警棒を難無くかわし、流れるような動きで男の腕を掴み関節を極める。それは相手の怪我を多少は考慮する捕縛のためのものではなく、

「ぎいいいいいいっ!？」

完全な関節破壊を目的としたものだった。限界以上に逆に曲げられた男の腕はバキリッという音を立て、不自然な方向に曲がり切る。

その激痛で男は悶絶し地面に倒れ伏した。

最後に残った一人は、その光景をただ茫然と立ち尽くして見ることしかできなかった。

チンピラと言っても、この男はアウトローを決め込んでのかつこつけなどでやってるにすぎない。数を頼りに他者を踏みにじっているだけで、個人としては普通の感性を持っている。

だからこそ、目の前の虚が自分達チンピラとは一線を画す、本当の意味で社会から外れた人間であると理解した。

「…で、お前はどつする?」

「……え?」

虚に突然声をかけられ、男は間拔けた声で返事をする。虚はそんな調子の男を見てため息を吐き、

「仲間が二人やられた。残りは自分一人。逃げるか戦うか。どっちだ？」

「…え、えと、お、俺はただ・・・こっこいつら二人に誘われてっその…だから、すいません・・・かつ勘弁してくださいっ！」

男は必死に言い訳をし取り繕う。逃げるでも戦うでもなく命乞いをする。その姿は無様ではあったが、仲間を捨てて逃げないだけまだマシだろう。虚はそれを見て、先程まで滾らせていた戦意を下げ、

「…ここでは所詮、こんなものか」

そして心底失望したように呟き、その場から立ち去った。

チンピラを完膚無きまでに撃退した虚が立ち寄ったのは、街の中でも比較的大きい公園。公園内は木が生い茂り、外から公園の様子をうかがうことができない、いわゆる街の死角の一つだった。虚は公園のベンチに腰かけ、先程の戦いを反芻する。

虚の感想は、面白味に欠けていた、のっただけだった。

虚が求めるのは命の取り合いというレベルのスリルであり、喧嘩という、彼にとってのお遊びではとてもその欲求を満たすことはできない。

しかし、この国では自身が求めるスリルを味わえる機会、場所は見つからないと虚は理解している。

さらにこの国は警察という優秀な治安維持組織がいて、きちんと機能する司法がある。

たった1回の殺人で10数年も牢に繋がれては堪らないし、平和ボケした相手を一方的に殺すのはただの虐殺と変わらないし、虚は覚悟のない弱者を甚振る趣味はない。

「…そういえば、刀傷沙汰になったな」

そこで虚は、先程の戦いで自分がしでかしたことを思い出した。

相手が所持していた刃物を利用したとはいえ、立派な刀傷沙汰である。これである男が死んだ場合、警察から追われることは明白。

「…国外にでも行くか？」

罪悪感より先に逃亡に思考がいくあたり、虚はやはり外れていると言えよう。

虚はどの国に行くか考えていたが、

突然、強烈な寒気が身体を襲った。

虚の感情はそもそも恐怖ということ自体滅多にすることがない。そんな虚に寒気を感じさせるほどの脅威、それはもはや感情ではな

果たしてこれは生きた生物なのかと。

そこから1分ほど対峙したままだったが一向に状況は変わらない。虚は痺れを切らし、肩の力を抜いた。

目の前の異形はあまりに戦意や殺気、それ以前に生気が欠けている。何かをしてくるわけではないだろうと、虚は判断し不用心に近づく。

が、その判断は結果として致命的なミスとなった。虚は、目の前の相手がこの世のどんな生き物とも違うということを意識しておくべきだったのだ。

虚が10mほど近づいたところで、異形は目にも止まらぬ速さで体積を膨張させ、虚が気付く間もなく呑み込んだ。

プロローグ（後書き）

プロローグです。

この作品は大分勢いで書いている感じですが、設定やら考えて書くこともあるんですが、いつのまにかダレて執筆を投げ出してしまうという状況になってしまつたので。

一応書き溜めはあるので、週2〜3回のペースで更新できると思います。来年の春から就職なんでそれ以降はわかりませんが。

それでは、回ごとに出たキャラを一言二言で紹介。

まず第一回、

夜空ヨル 虚ソノ

一応今作の主人公で、コンセプトはダークヒーロー。

参考にしたキャラは Fate zero 段階の言峰綺礼ですが、あそこまで悪に傾いているわけでもないです。

1話

虚は気がついたらどこかの荒野に立っていた。気付く間も無く異形に呑み込まれた虚にとつては、瞬き一つの間、街の公園から見知らぬ荒野に瞬間移動したようなものである。

動揺と非日常に遭遇したことによる歓喜に胸を躍らせながら周囲を見渡す。しかし虚の見知った物は何一つとしてない。あるのはただ広がる荒野のみ。

続いて空を見上げた。先程まで夜の漆黑だったはずの空は、茶色がかつた雲に覆われていた。

最後に携帯電話を開いた。…携帯のアンテナは圏外を示していた。

「…何が起きたんだ？」

虚はありえない状況の変化に思わず呟く。

しかし見当はついていない。恐らくあの異形が何かやったのだろうと。

やはり自分の見立て通り、あの異形は自分の退屈を潤してくれる存在だったと確信した。

そうと知れば、あとは楽しむだけである。虚は現在地も時刻も何もわからない状況で、あても無く歩き始めた。

歩いてからしばらく立つたが、虚は未だ荒野を歩いていた。どこ

まで続くかわからない広大な荒野。スリルに心を躍らせる虚も、さすがに体力まではごまかすことはできない。やや気だるさを感じながら重い足取りで歩く。

が、何かが迫る足音が虚の耳に届く。虚は素早く警棒を取り出し臨戦態勢を取った。そして足音が迫る方、背後に振り様に警棒を振る。

何か生き物を殴る手ごたえと、獣の悲鳴が響いた。虚はその正体を確認する。

それは犬と呼ぶには大きく、そして地球上のどのイヌ科とも違う奇妙な獣だった。しかし公園で出会った異形とは違い、少なくとも生命を感じさせた。

この獣を見て虚は、自身が現在立っている地が本当に地球なのかどうか疑問に思った。

が、生命の危機に晒されている今は、余分な思考を取り去ることにした。

獣は警棒で殴られ怯んだものの、再び虚に襲いかかってきた。獣の本気の殺気を受け歓喜に虚は口元を歪める。

獣の殺気は『相手を喰らう』という一点のみを目的とした混じり気のないもの、虚にとっては心地よさすら感じるものだった。

虚は今までの人生の中でも、半端なチンピラより野犬や熊を相手にしていたほうが楽しいと感じることが多い。彼らにはなんの加減も躊躇もなく、ひたすらに本気だからだ。

虚は警棒を握りしめ、獣と対峙した。間合いを計り、獣の筋肉の

収縮具合などを確かめつつ虚は獣に近づく。すると獣は全身の毛を震わせ、地を蹴り虚に飛びかかった。虚はそれをかわし、獣の横っ面を警棒で殴った。

「ギャピイイッ!?」

獣は悲鳴をあげたものの、まだ倒れる気配はない。警棒という武器では決定打を決めることは容易ではないようだ。虚は長期戦の予感を感じた。

虚はその後も、獣の突進をかわし、ある時は警棒で弾いていくという戦法で戦った。その攻防を続ける中で虚は、不良達から警棒だけではなくナイフも貰っておくべきだったかと少し後悔した。ナイフが無ければ殺した後、肉を捌くことができないと思ったからだ。

このどこまで続くかわからない荒野を、なんの食糧もなく歩くのは難しい。だからこそ、獣の血肉でも良いからエネルギーとなるものが欲しかった。

「グアアアッ！」

「つと、悪いな」

別の思考に埋もれていた虚の隙を突くようにして喰らいついてきた犬の牙を、上体をずらして難なくかわす。虚らしからぬ油断だが、戦いはもはや虚に大きく傾いている。

なぜならば、獣の中で、打撃によるダメージは着実に蓄積しているからだ。その証拠に獣は初期よりも動きが鈍くなっている。獣の右目は警棒の殴打により潰れ、もはや意識せずとも隙は見える状態となっていた。

虚は十分ダメージを与えたことを確信し、とどめを刺すことにした。

獣が襲いかかってくるタイミングに合わせ高く跳躍し、すれ違わずに獣の頭部を強く打ち据える。

それで生命が尽きたのか、獣は地面に倒れ伏す。虚は獣を足蹴にし反応を確認する。

「……死んだか」

虚は獣が死んだことで興味をなくしたのか、冷静に状況を分析し始めた。自分の体力もそう長くは続かない。消耗しきった時にまたこの獣に襲われた場合、さすがに勝つことはできないと虚は考えた。

なのでひとまず虚は、屍肉の臭いに誘われてくる別の生物が来る前にこの場を離れることにした。

それから虚はずっと歩き続けた。しかしいつまで経っても街らしき姿すら見えない。何時間も歩き続けたためか、虚の体力はもはや底を尽きかけていた。

そして…その場で崩れた。

地面に倒れ伏しながら虚は思う。こんなものか、と。ようやく自分の求めるスリルがある地に辿りついたというのに、餓えて死ぬというのは惜しい気がした。虚は、

「ここで終わりか…？」

そう言ったきり、力尽きたように身体の力を抜き瞼を閉じた。

地面が振動している感触を感じ、虚は再び目を覚ました。荒野で朽ちると思っていた虚だが、運命は未だ虚を見放していなかったようだ。

虚は意識をはっきりとさせ、目を開くと目の前に数人の人がいた。虚が目覚めたのに気付いた目の前の若い男が、

「お、目を覚ましたみてえだな…」

虚は目の前の男に油断を見せず、意識しない程度に警戒した構えで会話をすることにした。

「ああ…ところでここはどこだ？」

「へっ…知らなきゃよかったって思っぜ？きつとよ」

目の前の男は自嘲したように笑い、

「ここは奴隷馬車の中だ。お前も運が良いのか悪いのか、荒野で生き倒れていたところを拾われたんだよ」

そう言っつて男は手枷を見せる。そういえば…と虚は自分の手元を見ると、やはり手枷がついていた。確かに、男の言う通り運が良いのか悪いのかわからない状況だ。

しかし虚はさしてシヨックを受けず、ひとまず自分の武器である警棒の所持を確認するがどこにもない、恐らく取り上げられたのだらう。

冷静な虚を見て男はため息を吐き、

「おいおい、もうちつと驚いたり嘆いたりしろよ」

「生憎、そういつ当たり前の感情とは縁遠くてな」

虚はそういつて話を流しつつ思考を巡らせた。先程は先の見えない荒野でここがどこだかわからなかったが、こうしてこの地の人間と触れ合っつてあることが分かった。

それは文明が日本より酷く遅れているということだった。、今時馬車などそうそうないだらうし、馬車が走っているところは舗装さ

れていないただの地面だ。さらに目の前の男達の服装もどこか古臭く洗っていないためか土などの汚れに塗れている。

「つつかお前、ずいぶん妙な格好してるな、ほんと何者だ？」

「さあな」

虚は男をあしらいつつ、身の振り方、ひとまず服装についてはいつか標準的なものに着替えることを考えた。

しばらく馬車は荒野を走り続けた後、どこかで止まった。荷台の後ろの垂れ布が開き、厳つい男が顔を出した。

「下りろ、クズども」

もはや人を人間扱いしていないような言葉だった。虚はまるで映画みたいだなと内心想いつつ、他の奴隷に続いて荷台を下りた。

荷台を下りて見たのは、コンクリートではなくレンガや木で造られた家が立ち並ぶ、西洋の古い町並みだった。中世ヨーロッパの光景といったらわかりやすいだろうか。

「おいっ、さっさと歩けっ！」

景色に気を取られている虚を厳つい男が蹴り飛ばす。虚は特に激情して食ってかかることもなく、再び奴隷たちの列に加わった。

奴隷が連れて行かれたのは闘技場のような建物だった。しかし連れて行かれる場所は清掃が行き届いた1階の部屋や観客席ではなく、薄暗い陰惨とした雰囲気の地下。地下に下りた奴隷達は広間のような場所に集められた。

奴隷達の前で闘技場の従業員らしき人物が奴隷商人に金を渡している、どうやら取引が成立したようだ。そして奴隷商人が広間を出て行くと、その様子を眺めていた女が奴隷達に顔を向け、

「これで晴れて君達は闘技場の所有物となった。ここを出たければ、日々行なわれる闘技を生き残り、今さつき君達に支払った値段の3倍を稼がなければならぬ。まあ、闘技自体を好きになってしまう輩も中にはいるがね」

女は苦笑し、

「付き合いが長くなるか短くなるかはわからないが一応名乗っておこう。わたしはルイス」

「エヴァダン。君達奴隷の世話係を務めている」

虚は目の前のルイスの観察する。ルイスは闘技場という血生臭く、かつ後ろ暗い遊戯の職につくには、あまりに不釣り合いな、若く綺麗な女性だった。しかしその体軀は鍛え上げられており、並みの男よりも強さを感じさせる。さらに、奴隷達の反抗を視野に入れていたためか、腰にさしてある剣をいつでも抜けるといふ気配すらあっ

た。闘士の世話役というのは伊達じゃないらしい、と虚は思う。

「闘いが始まるのは明日からだ。それまで心の準備をしておくようにな」

そう言ってルイスは広間を後にした。

それからまた場所を移り、今度は刑務所のような場所に入れられた。牢屋がいくつもあり、奴隷はそれぞれ1部屋4人という形で押し込められた。

虚も部屋に入れられ、部屋の中は壁や床に血がこべりつき、カビのような臭いもする最悪の状態に思わず眉間を顰める。

「部屋も一緒にみたいだな」

馬車で虚の正面に座っていた男が話しかけてきた。偶然にも部屋が同室になったらしい。

「これも何かの縁つつうわけで名乗っとくぜ。俺はガイゼル＝アルターク、お前は？」

虚は名乗るかどうか少し迷ったが、一応は友好的な人間を邪見にする必要性もないと考え、名乗ることにした。

名乗り方としては、名前を先にして名字を後にすべきだろうか、と虚は考え、

「虚〓夜空だ」

「ウツロ〓ヨゾラ?... はあ、変な名前だな」

「..... まあな」

元々変わった名前だと虚も自覚していることなので、さして反応はしない。

「まあ、あの女も言っていたが、付き合いが長くなるかはわかんねえ。けど、お互い生き残ろうぜ」

「ああ」

「なあ、同室のよしみってことでそっちの二人も名前を聞かせてくれねえか？」

ガイゼルは明るい声で同室の者たちにも声をかけた。しかし一人はうずくまってブツブツと小声を呟くだけ、もう一人も意識があるのかすらわからないくらい放心していた。

「...なんだ、聞いちゃいねえな」

ガイゼルは興味を失ったように二人から目を離れた。ガイゼルの目から見てこの二人は生き残りそうにないと判断したためである。

虚もそれとほぼ同じ見解をした。

虚はその二人よりもガイゼルに関心した。奴隷の中で会話した相手はガイゼルただ一人だけだが、他に自分達と一緒に連れられた奴隷達は皆、怯えや緊張、恐怖や自失といった状態にあった。その中でこのガイゼルという男は彼らとは大きく違っている。

簡単に言えば、『生きる力』を感じさせるのだ。

「まあお互い明日は頑張ろうや」

ガイゼルはそう言って横になった。奴隷初日で随分な余裕ぶりである。虚も明日に備え、ひとまずは身体を休めておくことにした。

1話（後書き）

1話です。ようやく異世界来訪ものらしく…になってないですね。いきなり闘技場という閉鎖された場所にぶち込まれてますし。

今回出てきたキャラは、

ガイゼルⅡアルターク

コンセプトは、同室の仲間。

キャラのイメージは、スクライドの君島邦彦あたりです。

ルイスⅡエヴァダン

コンセプトは…ひとまず伏せます。

イメージとしては、空の境界の蒼崎橙子。あれほど完璧な思考回路をしてるわけではありませんが。

予約投稿何話も重ねてたら文字数がえらい事になりました。さすがに後悔してる小説の倍以上はまずい。予約投稿は1話ずつのほうが良いですね。

では、次回も宜しくお願いします。

2話

血と汗の臭いがする一室、そこにはこれからコロシムで殺し合いを始める闘士達が集まっていて、その中には虚の姿もあった。

虚は自分が手に持っているものを見る。それは片手剣に分類されるものであり、重量は、選べる武器の中で一番軽い。刃渡りも平均程度のものだが、今まで持った刃物がせいぜい包丁程度なので、虚としては十分長いものに思えた。

「なんだ、随分普通の武器を選んだな」

ガイゼルは虚の装備を見ながら言った。そういうガイゼルは両手剣の重量感のある武器を肩に担いでいた。

「そっちは随分と重そうな武器を選んだな」

「俺はこれでも力には自身があるんでな、こいつで相手の防御ごと弾き飛ばせば余裕だろ」

ガイゼルは言葉通り、両手剣の重量に負荷を感じない立ち姿をしている。単純な腕力は自分より強いだろうと虚は推測した。

「それに、戦う相手は同じ新人、力押しでなんとかなるはずだ」

ガイゼルの言う通り、今から始まる闘いは闘技経験のない新人のみが参加し、新人同士で潰し合い実力者のみを残していくという、いわば篩いの意味合いを持つものだ。

「ま、俺らは幸い殺し合う仲じゃないからな、お互い協力していこうぜ」

「そうだな」

闘いの形式はチームデスマッチ、現在この一室に集められている者たちは赤軍に分類され、敵の青軍の闘士と戦うことになる。そして多く生き残っていた軍が勝利チームとなり賞金を得ることができ

る。
注意事項として、開始から時間終了まで逃げ回るなど、消極的姿勢を見せた闘士は、容赦なく上から弓矢などで射殺される。

「死ぬ気で殺し合って金は貰えないなんてことになるのは癪だからな、勝つ気で行くか」

「無論そのつもりだ」

虚もちろん勝つ気である。が、それよりも今は殺し合いへの期待と興奮で胸が高鳴っていた。

『それでは！今日この日、輝く光の下で熱き死闘を演じてくれる闘士達の入場です！』

「出番だぞ虫けらどもっ！せいぜい戦って死んでこい！」

待機していた係の男が罵声を飛ばしながらレバーを引く、すると目の前にあった柵が勢いよく上がり、それと同時に待機していた闘士達がいつせいに駆け出した。柵が上がった時点で既に闘いは始まっている。

『オオオオオオツ！』

観客の歓声とともに、闘士達が弾かれるようにしてコロシウムに入場した。コロシウムの広さ、形状は半径50mの円になっている。青軍と赤軍は対面するように配置されている入口からコロシウムへと入場し、その勢いで相手の軍とぶつかり合った。

響き渡る剣戟と飛び散る血しぶき、興奮で上がる観客の声援や罵声、コロシウムは異質な熱気に支配されていた。その中で虚は新人の中でも積極的な闘いを見せていた。

まず最初の激突の際、虚は赤軍の中でも先頭を突っ切るほど速く、青軍の闘士と闘いに入った。

最初に激突した相手の得物は斧、薙ぐようにして横に振られた攻撃を虚はかがんでかわし、斧の遠心力で身体が浮き隙だらけになった闘士の腹部に長剣を突き刺した。

「ぐふっ……」

闘士は口から血を噴き出す。虚にとって明確な意思を持って、相手が死に至る攻撃をしたのはこの時が初めてなのだが、虚はさして精神的動揺もない。

そして、別の青軍の闘士が虚に襲いかかってきた。虚は素早く瀕死の重傷を負った青軍闘士の身体から長剣を抜き、バックステップして攻撃をかわす。

一定の距離まで離れて虚が目の前を見ると、自分に向かってくる相手の数を確認した。相手は3人、それぞれ槍、メイス、短剣といった武器を装備している。

槍を持った闘士が間合いを生かし突きを放ってきた。

虚はそれを俊敏な体さばきでかわす。

そこに、軽量の武器ゆえに素早い動きを取れる短剣の男が、虚の背後から突進してきた。

しかし虚は気配のみでそれを察知し、身体を逸らすことで回避、同時に短剣の男の身体を掴みそのまま前方に突き飛ばす。突き飛ばした先では闘士の槍が勢いよく突き放たれ、そのまま短剣を持った闘士の胸を貫いてしまう。

同士討ちに動揺した槍の男を倒そうと虚が前へ駆け出すが、二人の間にメイスを持った闘士が入り込む。虚はいったん立ち止まり、闘技場の土を蹴った。

「あぐっ……くそ卑怯」

と抗議する間も無く闘士は虚に心臓を刺され絶命した。

残りは槍を持った闘士ただ一人。しかし、3対1という有利な状態で戦ったにも関わらず、内二人を呆気なく倒された事実を目の当たりにして、新人闘士の心は折れた。闘士は虚から背を向け逃走しようとし、

「逃げ出す負け犬君は、死んでね」

いつの間にかやってきた闘士に袈裟切りにされた。虚は得物を取られたことの怒りより先に疑問を抱く。

「…同じ色の、仲間を殺すとはどういうつもりだ」

そう、虚の目の前にいる闘士は槍を持った闘士と同じ軍であることは、着ている革鎧の色が青であることから推察できる。この闘士が行なった行為は仲間殺しに他ならない。

「仲間？面白いこというね君。こんな雑魚が僕の仲間だなんてね！」

目の前の闘士はいつのまにか持っていた短剣を虚に、否、後ろから虚に斬りかかろうとしていた青軍の闘士に投擲した。狙いは違わず、短剣はその闘士の頭に突き刺さり絶命した。

またしても味方殺し、それも虚を利するような行動。

虚は目の前の男に敵味方の区別がないということを知り、次に投擲の技量に驚き、そして目の前の闘士の強さと異常さを感じ取った。まず容姿からしてこの場に相応しくない。

銀髪の長髪に整えられた顔、滲みでる高い存在感、どう見ても奴隷の身分である闘士であるのはおかしいように思える。

そこで虚は思考を停止した。真横から別の青軍闘士が迫ってきたからだ。

体当たりじみた突きをかわし、そのまま相手の足を引っ掛けて躓かせ、態勢が崩れて倒れかかった身体を掴み長剣で突き刺す。

その一連の動作に銀髪の闘士は歓喜とも取れる笑みを浮かべ、

「新人戦って言うからあまり期待してなかったけど、君みたいに出会えるとは、僕も運が良い」

銀髪の闘士はそう言って手に持った長剣を構えた。奇しくも虚と同じ武器、しかし銀髪の闘士はどこかで剣の修練を受けたのか、型が入った構えをしている。

「それじゃ、まずは試しに」

言うや否や、銀髪の闘士が素早く動いた。その動きは虚をして目にも止まらない速さ、虚は勘と気配だけを頼りになんとか反応し、銀髪の闘士が放った斬撃をかわす。

「…っ！」

いや、正確には急所から外したに過ぎない。虚は腹を少し斬られたのか、血が服に滲んでいた。しかし致命傷ではない。その結果に満足したのか、銀髪の闘士は笑みを浮かべ、

「剣に慣れてるわけじゃないのにその動き、なかなか将来性を感じさせる　ねっ」

続け様に、目にも止まらぬ突きの連撃を放った。虚はそれを剣でいなし身体を捻りなんとかやり過ごす。だがその連撃には隙らしい隙が見当たらず、虚は攻勢に転じることができずにいた。

その内、銀髪の闘士が放つ突きの勢いがやや甘くなる機が来た。虚はそれを見逃さず、突きを思いつきり剣で弾き、そのまま踏み出して斬撃を繰り出した。

「おっと」

結果としてそれは、銀髪の闘士の髪を数本斬るだけに終わった。虚の斬撃を銀髪の闘士は最少の動きでたやすくかわしたのだ。

そうなると隙ができるのは虚のほうである。先程の斬撃は虚にとつて乾坤一擲の攻撃だった。ようやく攻勢に転ずることができ力が入り勢いづいてしまったためである。

無論その隙を銀髪の闘士が見逃すはずもなく、無防備となった虚に対し確実に死に至るであろう刺突を放とうとして、

終了の合図の鐘が鳴り響いた。

『闘技終了！勝者・・・赤軍！！』

「…あら、負けちゃった」

銀髪の闘士は構えを解いた。闘いが終えたことにより、きつぱり殺意や戦意を抜いたようだ。しかし虚は彼ほど割り切れるわけではなかった。

「…ふざけるな、まだ殺し合いは終わっていない」

「いや、終わりだよ。君はあそこで死んでいた。終了の鐘に助けられたに過ぎない」

銀髪の闘士は冷静に言った。虚もその認識があつたためか、それを言われ押し黙る。それを見た銀髪の闘士は笑みを浮かべ、

「まだ闘争の道には入ったばかりのようだね」

その言葉に虚は心臓が高鳴った。銀髪の闘士は、虚の中にある闘争本能を、短い戦闘の中で易々と見抜いたのだ。

「君はこの先伸びるだろうから一応名乗っておこう。僕の名はサーフィル」ゼフィル、君は？」

「…虚」夜空だ」

「ウツロ」ヨゾラ…ね。変わった名前だけど、まあ覚えておくよ、君の名前」

サーフィルはそう言って、軽い足取りで出口に向かって行った。サーフィルが離れて数秒後、

「よく生きてたなお前」

ガイゼルが現れ、虚の肩を叩いた。ガイゼルは去っていくサーフィルを見ながら、

「さっきのあの男、遠目で見ただけが短時間で7人は殺していや

がった。お前が相手してなかったら10人は軽く越えただろうな」

それを聞いて虚はさして驚かなかった。あの技量に身のこなし、新人闘士を短時間に殺すことなど造作もないことだろう。

「まあ、無事勝利し生き残ることができた。幸先の良いスタートだな！」

「そうだな……」

ガイゼルは陽気に言うが、虚はそんな気分にはなれなかった。虚は、サーフィルが間違いなく自分より遙か格上だと、先程の戦いで思い知った。

人間同士の本当の殺し合いの舞台に出て、早々壁にぶち当たったような感覚を虚は味わっていた。

2話（後書き）

2話終了です。

今回登場したキャラ

サーフィル、ゼフィール

このキャラのコンセプトは、『主人公のライバル』です。
イメージは、ハンター×ハンターのヒソカ。あれほど変態ではありませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7949z/>

虚ろな男の生きる道

2011年12月29日12時54分発行